

II 第一の神のことば「わたし以外に神はいない」 出エジプト 20:3、申命記 5:7

20:3 あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない。

出エジプト 20:3

はじめに

前回から待望の「モーセの十戒」にさしかかった。さて、表題をつけるにあたりさっそく行き詰ってしまった。「十戒」の「戒」の字を使うべきか使わざるべきか、という課題である。神の契約で学んできたように、聖書はこれを「十のことば」と神自らが名付けておられるからである。(出エジプト 34:27～28)。

そもそも、神の契約は、徹頭徹尾「恵みの契約」であり、「あがないの契約」は神の主権に基づく無条件契約であった。主のことばに従って祝福を受ける際にも、神の恵みがアブラハムを支え続けた。アブラハム契約が一方的な片務契約であればこそ、アブラハムは試練の中で、神に従い続けることが出来たのであった。戒めに先立つ先行恩寵がどこにも見られたではなかったか。

1. わたし以外に

(1) 唯一神的神観の啓示

もう一度ご覧ください。「あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない。」20章3節は、申命記5章7節にも同じ言葉でモーセが繰り返している。「わたし以外に」は、「わたしのほかに」とか、「私をおいて、ほかに」とも、「私と並んで」、さらに「私に逆らって」などいろいろの訳がある。

いろいろの神といえども、それらの神は人間が作りだしたものであり、人間の想像の産物に過ぎない。それらは、神と言っても神ではなく、そのような神々をまことの神と並べるべきではない。まして、神ならぬものを神として礼拝したり、崇めたりすることを禁じることは当然であると言うのである。

(2) 十戒が与えられた歴史的背景から読む

すでに、神の契約の歴史において学んできたことであるが、短く確認しておきたい。イスラエルの民は、エジプト脱出後モーセを通して十戒を与えられた。

イスラエルの民はヨセフが宰相として権威のある立場にいるときは、王家の好意を享受したが、王朝の権力移行で窮地に陥る。「やがて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった。」(出エジプト 1:8～11)。奴隷状態に陥ったイスラエルの苦難からの救いを求める声を聴かれた神は、アブラハムに与え、ヤコブ(イスラエル)になさった約束に忠実であられ、モーセによる不思議な方法で、彼らを奴隷状態から救い出されたのであった。このような、神の恵みによって救い出した神が、ご自身の民に、

頭ごなしに、一方的に、無理矢理に命令されるということはありません。このような、神の一方的な恩寵に対する感謝の応答として、神が、「神であるわたしだけを神としなければならない」と呼びかけられたのである。イスラエルは救われた者の当然の応答であり、また信仰の告白として第一のことばを聴くべきであった。

新約の神の民とされた私どもも、イエス・キリストにあってまことの神はこの方以外にはない、神の愛のこの語り掛けは当然のこととして受け止めていきたいものである。

2. あってはならない

(1) 禁止命令への疑問

神に愛されている契約の民は、神が「あなたにとって、まことの神は私以外にない。だから、あなたがわたしの他に何ものかを神とすることは考えられない。」と言われることを聞いて、なるほどと思ったのではなかろうか。ではなぜ、この言葉の最後が、「あってはならない」という禁止命令になるのかという疑問が湧いてくる。

それは、禁止しなければならないことをイスラエルの民がしてしまうことを、神は知っておられるからである。エデンの園で、神の禁令を破って罪に落ちたアダムの子孫たちは、罪を犯すものとなっており、あがないの契約を受け、アダム契約の恵みの中にあっても、主の民は神の命令に従わない性向を持っていることを、神は先刻ご承知であられる。ここに、神を信じる者の危機がある。

(2) シナイ山の麓から約束の地を前にして

シナイ山の頂上でモーセが十戒を示されているとき、すでに、山の麓では、イスラエルの民が金の子牛を神としていたという恐るべきイスラエルの民の姿が描かれている。「【主】はモーセに言われた。『さあ、下りて行け。あなたがエジプトの地から連れ上ったあなたの民は、墮落してしまった。彼らは早くも、わたしが彼らに命じた道から外れてしまった。彼らは自分たちのために鋳物の子牛を造り、それを伏し拝み、それにいけにえを献げ、“イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神々だ” と言っている』」（出エジプト 32：7～8）。

時はさらに下ってほぼ 40 年、今や約束の地をまじかに望む荒野でモーセは三回目の説教を民に語る。それは申命記の 29 章、30 章である（同 29：17～18）。

十戒は、エジプトから解放され自由の民とされたイスラエルが、約束の地に向かう途上で与えられた「自由の道しるべ」であり彼らを縛る恐ろしい戒律ではない。われら主の民は、イエス・キリストにあって自由であり、この道しるべに従って自由人として生きるのである。（ガラテヤ 5：1）。

(3) 神の民以外の人々の思想と宗教観

第一のことば「あなたには」という文字は単数であるが、言うまでもなく、神の民全体に対する呼びかけである。聖書の神を信じて、神の定め生きる者は、真の意味での十戒を生きる者である。神の民に属しているからである。この民に属していないものに

とって、十戒は何の意味も持たず、陳腐なものと思うのが自然なことであろう。

そもそも、まだ神を信じられない人々に対して、神のことは第一義的に服従を求めている。神によって奴隷状態から救い出されたことにより、神との間に結ばれる愛と信頼のきずなは存在しないのである。この前提に立って、神の民以外の人々の思想と哲学と宗教観を以下に見る。

① 非キリスト教的思想はさまざまな世界観として人類の歴史に登場してきた

そのすべてを述べることはここでは本来の目的ではなく、紙面も能力もない。よって、概観を述べるにとどめたい。それは、私の若き日の思想遍歴の記録でもあり、キリスト者となる前の迷いの道程でもあった。河上 肇氏の「たどり着き、振り返り見れば山川を、越えては越えて来つるものかわ」という感慨を同じくするものであった。懐かしい青春の悩みの日々の記憶でもある。

ちなみに、河上 肇氏はどのような人物であったのか。彼はマルクス主義者でありながら、内村鑑三の山上の垂訓の講演を聞き、心の煩悶を覚えつつ大いに感動したというエピソードが知られている。社会学者として、また宗教的真理探究者として、生涯求道者精神を貫いた大いなる人物であった。さて、わが遍歴は-----。

世俗主義-----永遠を無視する思考

悲観主義的実存主義

感傷的ヒューマニズム

プラグマティズム-----メイド・イン・ジャパン

実証主義・懐疑主義-----百聞は一見に如かず

多元主義と相対主義-----すべては相対的、絶対はない、したがって神はいない

快楽主義-----楽しみはすべて味わおう！

② 教会の歴史は混迷の時代、霊的戦いの連続であった

教会史、教理史に明るい歴史神学の造詣者は、初代教会から絶えずこの世の思想の影響を受け揺れ動き続け、数えきれない信仰の戦いを経てきたことを知っている。

★初期の教会の異端者への反駁-----教父たちの指導

★公同教会の教義の確立と信仰の確立-----護教家たちの活躍

★五世紀、六世紀の東西ローマ教会の正統的合意の構築-----教会の普遍性と権威

★中世教会史の問題-----教会と国家、十字軍、文芸復興

★宗教改革と対抗改革

★合理主義、信仰復興運動、教派主義

★二十世紀の教会と世俗国家の諸問題

★ポストモダンの時代の混迷-----現代的課題である

宗教哲学者による宗教多元主義の提唱

進化論的世界観の浸透-----非キリスト教世界への影響、有神進化論者の増加

このような教会史の変遷は、遠くさかのぼって、人知に頼ったカインの末裔と主の名

を呼ぶセツの家系の相克に端を発していると思えるのである。

3. 多神教と一神教

第一の神のことば、いわゆる「十戒の第一戒」は、排他的で非寛容で好戦的であるとの非難を受けていることは、十分承知している。先ほど述べたような、多元主義の立場から見れば当然のことである。さらに、「和」の精神をモットーにしている多神教の国日本の宗教土壌から見て、許容できないのであろう。日本宣教が進まない理由の一つであると思われる。そこで、多神論について弁証を試みたい。

(1) 多神論は人間中心主義！

多神教の神々は人間によって作り出され、人間に仕えるために信仰の対象とされる。したがって、神々よりも人間の方が優位にあり、人間が神々を支配するのである。多神論に立てば神の絶対性も、神の論理や神の定める基準を受け入れることはできず、人間の定める基準に適合させ合理化させるのである。その神々は、人間あつての存在であり、人間の願望の所産である。

(2) 多神論は真理の追及を求めない

最優先すべきものは「共存」と「和」の精神である。真理は「二の次三の次でよい」ということが重要で、「和」こそが真理であり絶対とされるのである。たとえ正論であっても「和」を乱せば受け入れられず、争いを避けるために譲歩し、妥協することが尊しとされる。「清濁併せのむ」度量の広さが人物評価で求められる。神の絶対性（唯一性）を否定しながら、「神々の共存」を絶対化するというのは自己矛盾である。

(3) 多神論は排他的ではないか？

「和」を絶対的真理という主張は、一神論を非難する排他性と同じ非難を受けなければならない。日本的制裁方式の「村八分」は、子供のいじめ、シカトの根源精神ではないのか。

(4) 多神論も戦闘的歴史を持つ

一神教民族は好戦的、多神教民族は平和的という説は事実と反している。聖書にも登場するアッシリヤ帝国、バビロン帝国、ギリシャ帝国、ローマ帝国はみな多神教民族の帝国である。アジアのモンゴル帝国も同様であった。

(5) 多神論は無神論であることをご存じか？

一神教は全知全能の永遠なる全能の神が唯一存在することを信じているのであり、複数の、したがって不完全な神は、存在しないのと同様である。一神教は不完全な神を神とは認めず、不完全な神々の宗教は無神論の一形態という認識がいるのではないのか。

むす 神の第一のことばについて、考察を広めてきたが、それは私自身の宗教遍歴、人生の真理探究の足取りでもあった。そして、キリスト教信仰探求の求道歴でもあったと気づかされる。であるから、「私なりの十戒」と言っても過言ではないと思っている。